# 衣生活の中から拾う

## ―― 葛　　布 ――

中　村　寿　子

### はじめに

人間生活における衣の果す役割は，昔も今も変りなく極めて重要な位置を占めている。原始以来，きびしい生活環境の中で，衣は身体の保護，社会的背景，自己顕示その他，種々の要因が作用し合いながら，長い歴史の流れにのって変化を続けつつ現在に至っている。

現代衣生活においては，多種多様，豊富な被服材料に恵まれているが，原始の時代に，人間が体につけ始めた衣服は，何を使ったものであろうか。

文献によれば，エジプトでは既に紀元前5,000年の昔に，アサ布，アマの種子が出土されており，中国でも早くからアサ，カラムシの織物など発見されているという。

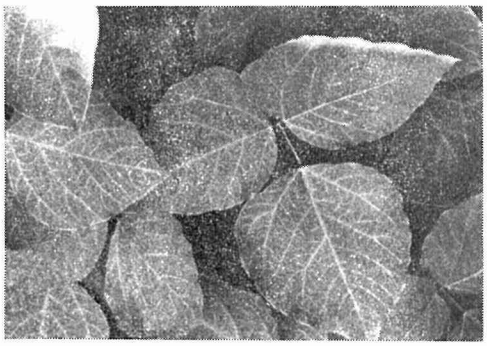
それでは，これらアサ，カラムシが普及する前は，何を用いていたのであろうか。おそらく人々は，狩猟で得た獣皮の他に魚皮，鳥皮や，まわりの山野に自生する植物のコウゾ，シナノキ，フジ，クズなどを採取して用いたものと思われる。

現在南太平洋上の島々で作られているタパという樹皮布は，カジノキ類の樹の皮から作った布であり，日本においても，沖縄の芭蕉布は糸芭蕉の茎の繊維で織った布であり，徳島の阿波太布もカジノキから，新潟県の科布はシナノキから，東北のおころぎはコウゾから，長野県の蕁布(いらの)はイラ草から，藤布は丹波袖志で，葛布は静岡県掛川及び佐賀県佐志で，夫々昔の伝統を守り，今も尚生きつづけているのである。今回はこれらの中の葛布についてまとめたものを報告する。

### 1.　葛という植物

#### 1―1　生態と用途

葛はマメ科に属する多年性の植物で，秋の七草の一つに上げられており，日本全国山野の至るところに自生する，極めて生育さかんなつる草である。（写真1）



写　真　1

茎に互生する葉は，尖りをもった3枚の葉で茎と共に短かい毛が密集し，根は地下に深く広がる。6月頃から地上にのびた茎は，つる状になって地面を這い，或はまわりの木々に巻きつく。8月頃から秋のはじめ頃には，赤紫色の美しい花を咲かせる。（写真2）

写　真　2

この時期には，山間部を走る列車の窓からも葛の葉の生い茂っている様を容易に見かけるこ

とが出来るが，そのたくましさに目を見はるものがある。

地下に伸びる根から澱粉を採集。これがくず粉で料理に使われる。又葛根は葛根湯としてかぜ薬に，肩こり，歯痛，じんましんなど，皮膚機能、運動機能を正常にするはたらきがあるとして広く利用されている。更に地下に縦横に広がる根は，堤防の土砂崩れを防ぐという。

3枚の大葉には栄養価があり，生草，乾草にして家畜の飼料とし，落葉は土壌に腐植質を与えるという。緑葉は草木染として利用でき，媒染剤によって黄色，うす緑に染まる。

美しい赤紫色の花を，賞がん用とする人もあるという。

茎はその靱皮を利用して織物，製紙原料とされる。他に葛家，葛屋根，葛垣，葛屨（後述）などあり，屋根材，垣根材，わらじ用として，茅，麦わらと共に強じんな性質が利用されたであろうことは想像される。

日本では，切っても尚つるを伸ばして這い廻るこのしたたかな植物を，危介な雑草の一つとしてきらわれ，除草に苦労しているが，アメリカでは，土壌保全用，家畜飼料用として栽培されているとのことで，何とも皮肉な話である。

このようにして葛という植物は，原始の時代から人間生活と大いなるかかわりをもち，少しの無駄もなく利用され，くらしに役立ってきたことが分るのである。

### 1—2　古歌にのる葛

ところで日本では，葛は古くから歌によみこまれ，万葉集その他の古典に数多くのせられている。その中のいくつかを拾ってみよう。

葛の葉は大形で風によく裏返るので，「裏見」から「恨み」をかけ縁語とすることが多い。

例えば

秋風の吹き裏がへす葛の葉の
　うらみてもなほ恨めしきかな
古今和歌集巻十五恋歌五 823

ひとり寝やいとど寂しきさ男鹿の
　朝臥す小野の葛の裏風
新古今集巻五秋歌下 450

うつろはでしばししのだの森をみよ
　かへりもぞする葛の裏風
和泉式部集

秋風はすごく吹くとも葛の葉の
　うらみがほには見えじとぞ思ふ
和泉式部集

山里はくずのうらはをふきかへす
　風のけしきに秋を知るかな
新勅撰秋上 204

秋風と契りし人は帰りこず
　葛のうら葉の霜枯るるまで
玉葉集雑一 2028

くずかづらくる人もなき山里は
　我こそ人をうらみはてつれ
伊勢大輔集

葛はつるが長くたくましく，どこまでも這い渡ることから，「のちもあわむ」「いや遠く」「ありさりて」にかけてよまれる。

例えば

大崎の荒磯のわたり延う葛の
　行くへもなくや恋い渡りなむ
万葉集巻十二 3072

木綿つつみ白月山のさな葛
　後もかならず逢はむとぞ思ふ
万葉集巻十二 3073

木綿畳田上山のさな葛
　ありさりしかも今ならずとも
万葉集巻十二 3070

上記にもみられるが，葛を「かづら」とよませているのが，この他にも数多くみられるが，当時つる草の一切を総称して「かづら」といったものらしく，葛もそのつる草の一つであったからといわれる。

## 2.　繊維植物としての葛

葛の茎の靱皮の部分は，織糸として利用されこれで織り上げた布を「葛布」とかき，カップともクズヌノともクズフとも称せられる。

### 2—1　葛布の起源

原始の時代，山野に自生する葛を採取し，衣

服用としたと思われると前述したが，中国の詩経，書経には，既に貢物として，或は着用したことが記されている。即ち紀元前 800年頃，周の時代にまでさかのぼる。中国の古典詩経，書経にあらわれる「絺」「綌」は葛布，かたびらを指し，前者は目の細かい葛布のことで，上等品で貢物にも使われ，後者は目の粗い葛のかたびらをさし，粗末な品である。又「履」は葛のつるであんで作ったくつで，わらじ様のもの。夏季に用いる。

葛の覃びて中谷に至る
維れ葉莫莫たり
是れ刈り是れ濩て
絺となし綌となし
之を服して斁うことなし
詩経　葛覃　二

厥の賦は中の上
厥の貢は塩絺　海物……略
書経　夏書禹貢

葛の履は五つ両い　……略
詩経　南山　二

糾糾たる葛の履
以って霜を履む可し　…略
詩経　魏風　一

当時葛糸で作る細か目の布（絺）を主に貢物とし，粗ら目の布(綌)は一般庶民が着用したものであろう。夏用の葛の履で霜の上をふませ，更に裳を縫えというけちな風俗と嫁御寮のいたましさがうかがえる。

中国においては，日本よりもはるかに遠い昔に，既に葛布が作られ使用されていたことが理解出来るのである。

### 2—2　葛布の歩み

日本において，上古時代といわれる縄文期土器から，織物の存在を知ることができるが，布織りの技術がその頃になされていたかどうか。漂流してきた布ではないかとする説もある。

日本書記により，紀元前33年(崇神天皇65年)から紀元前28年（垂仁天皇２年）には，朝鮮との交流があり，紀元 200年（仲哀天皇９年）に朝鮮の織物が日本に伝えられたことを知る。そして紀元283年（応神天皇14年）頃から，中国，朝鮮から染織技術者を多数招へい，新しい技法が移入された。彼の帰化人秦氏，漢氏らの一族はその後大和地方を中心に，各地に染織の技術の普及をはかった。地方に分散した彼らによって葛布も織られたであろうことは，大和吉野地国栖の民が，特産品として葛布を作り，これを「くずかづら」で織った葛布と称して献上したということからも，容易に想像される。

ここに一つの記録がある。江戸時代の博物学の書「大和本草」の中で，著者貝原益軒は次のようにのべている。

「ふじ衣は是本朝古代の喪服なり。藤布はこはくして布織りがたし。おりても貴者は服しがたし。葛布を用ふ。古俗かづらをすべてふじと云ふ。中略故に葛をもふじと云ふ。中略葛布にて製せし喪服をふじ衣と云へり」

古典にのる喪服は，ふじ衣とあってもそれは葛布で作られた衣だというのである。つる草を「かづら」と称した当時は，名称の上では区別なく通っていたものと思われる。これを国栖の民は，「ふじかづら」と「くずかづら」をはっきり区別して葛布と称したのであろう。

帰化人秦氏らとその一族が，奈良，平安時代と活躍し，優秀な技術をもって地方文化の発展に功をなしたことは衆知のことであるが，静岡県史による，彼ら一族が遠州掛川の里にもその技術を残したという説は興味深い。

葛布は現在，佐賀県佐志と静岡県掛川市で織られている。前述の如く，中国周の時代に既に葛布があり，日本においても，大和時代より各地で織られたものと思われるが，遠州掛川地方に特産として記録に出てくるのは，鎌倉時代からのようである。

本稿では以下掛川市における葛布について報告する。

この地に伝わる伝説によれば，

その昔，掛川の山中（現在の静岡県周智郡天方村）に滝があり，或る日この滝に打たれ修業していた行者が，滝水にさらされた真白の葛の繊維を見つけた。行者の所に通う老婆に葛の繊維を採る方法を教えたところ，老婆はこれで布を織り，領主に献上した。領主はいたく喜ばれ

滝を「葛布の滝」と名付け，布をこの地の産業として奨励したという。この年代は明らかではない。この行者が，あるいは，例の秦氏の流れをくむ者ではなかったかと推測される。

「遠江国調誌」に「掛川の葛布，始めは詳らかならずとも，鎌倉に於て，鶴岡八幡宮神前にて静御前の舞を右大将頼朝公御賞翫の時に，原田荘西山城主工藤倉濃守祐光，葛の直垂袴にて出給うと，頼朝公御問ひあらせられ候時，この紺葛布は当国の特産なりと答う」とある。又古今著聞集には，「頼朝が平家の召人続木平太経家を呼び出し，悪馬にのせる時に，さらば召せとて，則召いだされぬ。白水干に葛の袴をぞ着たりける」とある。鎌倉時代には，このように衣服用として織られ，袴，蹴毬用サシヌキとして着用されて次第に掛川地方の特産となってきたと思われる。

夫木和歌抄に参議為相郷の歌

これもこのところならひと門毎に
ほすてふぬのをかけかわの里

がある。掛川は東海道の宿場として賑わい，家毎につるし干されていた葛布は旅人の目を引いたものであろう。

徳川時代初期には，参勤交代の大名は土産品として珍重し，武士の裃地，馬乗袴地，道中合羽地など広く愛好され利用された。（写真３）

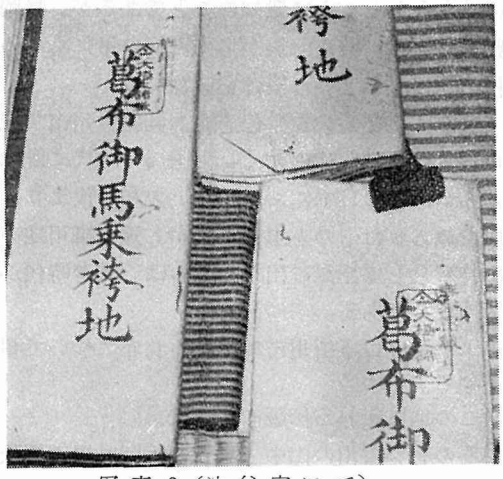



写真３（池谷家にて）

その後，明治維新の社会変動は，葛布業者に大きな打撃を与えた。武士が無くなり，裃地，袴地の需用がなくなったのである。倒産の止むなきに至った問屋が続出。葛布の残部は輪島塗の下張り，下駄の鼻緒，襖引手の破れ止めなどで処分する有様となった。

明治６年，葛布業古田屋池谷平右衛門は，襖の引手の周囲に破れ止めとして張られていた葛布からヒントを得，広巾の襖地，壁布を織ることに成功。つづいて織元川手幸吉初代がこれを商品化して，東京などに出荷。丈夫で光沢の美しい布として好評を得たという。（写真４）

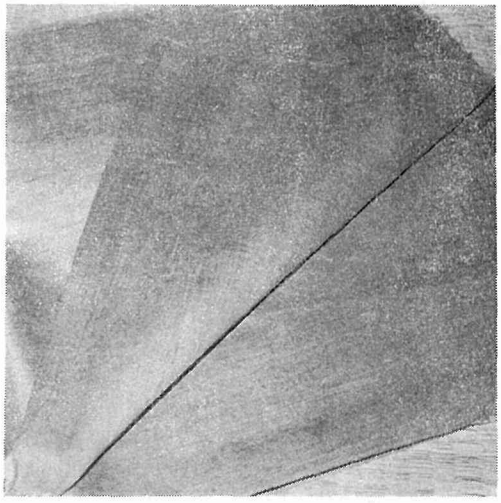


写真４（池谷家にて）

以来，葛布は衣服用から住居用へと移り変っていった。

写真５（池谷家にて）

写真5・6は，江戸時代使われた店卸帳，買入帳かわら版などで，安政2年，嘉永7年の文字がみえる。「名産葛布御襖地」は桜の木の木版で刷り，荷を作る時に上に巻いたもので，今の包装紙とでもいおうか。葛布の取引きを盛大にやっていた古田屋池谷平右衛門の家に残されている貴重な品々である。（写真6）

写真6（池谷家にて）

掛川宿に特産品として栄えた原因は，この地の交通上に利のあったことの他に，現金収入に関する点にあるといわれる。江戸時代，明治時代共に現金収入の乏しかった人々には，近辺に自生する葛を刈り取り，手間仕事として苧を作り機おり場に出して賃金を得ることである。更に加えて社会の変革に対して，直ちに他に転業のできないという城下町のもつ保守性が，この業を維持存続発展せしめたと，地元の戸塚一郎は「葛布の歴史」の中でのべている。

明治30年頃から昭和35年頃までは，壁布としてアメリカ，ヨーロッパまで輸出したり，国内でも寺院など需用に答えて順調であったのが，その後の社会変動，韓国産葛布の輸入などにより，再び業界は打撃を受ける破目となった。当然廃業する業者も出，現在は葛布を専門に織っているのは先の川手幸吉の四代目，川手茂市（こたけや）のみとなっているとのことである。

### 2—3　葛布の出来るまで

葛布は昔1人の行者によって，繊維作りが伝授され織物として発展したといった。

この素朴で優雅な布が，どの様にして出来上るのか。近郊の農家では今も採取から苧つぐりまでを丹念に手作りしている。

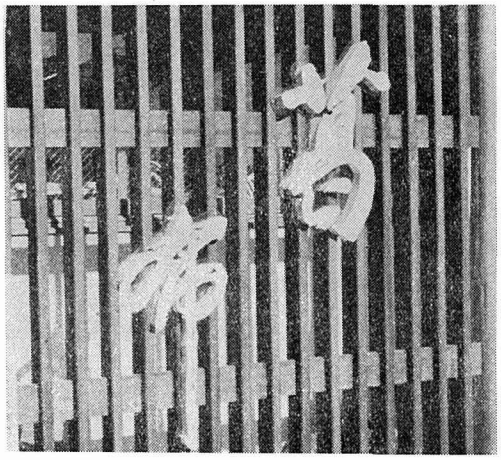



写真7（こたけや）

(1)　採取

6月から8月頃まで葛蔓の新芽を採取する

初期の1番くずはつるが丈夫で太く上質なものが得られる。10月頃の2番くず，3番くずは細く硬くなり，花の咲くものや樹に這い上るものは適さぬ。地面を這うものが茎が真直ぐでくせがなくてよい。（写真8）

写真8

(2)　釜茹でと発酵

採取した葛の葉を取り除き，茎だけを輪にして大釜で約40分程茹でる。（写真9）

釜から取り出したものを，3時間から半日位流水にさらしてさます。これをむろ（地面を30

センチ程堀り，下に色の出ない生草，かや草，ワラなど敷いた処）に並べて上に生草，筵をかぶせ約2昼夜ねかせて自然発酵させる。

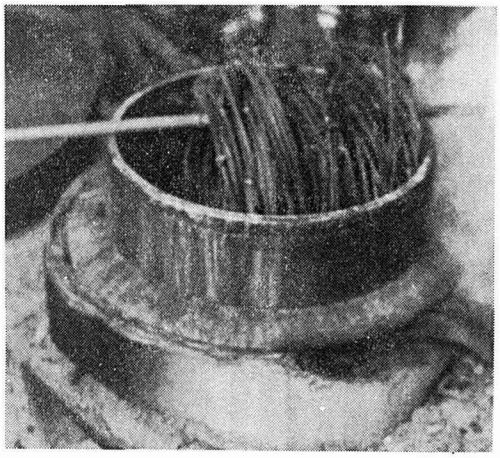


写真9

### (3) 繊維洗いと乾燥

むろから出して，そのくさった表皮を流水できれいに洗い流し芯をぬいて靱皮を集める。米のとぎ水に浸けて更に仕上げ洗い。（写真10）

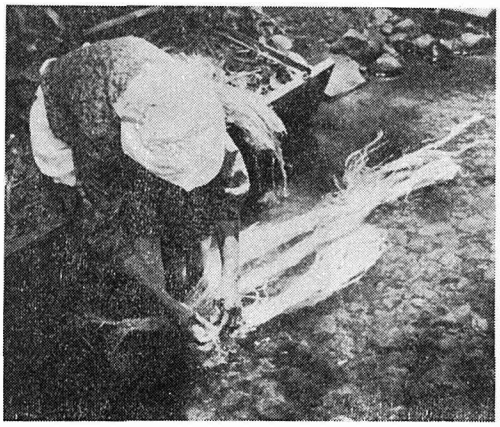


写真10

1本づつを，ていねいにのばしながら竿にかけて乾燥する。乾くと白い光沢のある繊維ができ上る。これが葛原料である。（写真11）

### (4) 苧つぐり

乾し上った繊維（葛苧）を指や針で細くさいてこれをつぐり（継ぎたす）長い糸状にする。よい苧でないとうまくさけない。これを箸にチ鳥まきする。（写真12・13）

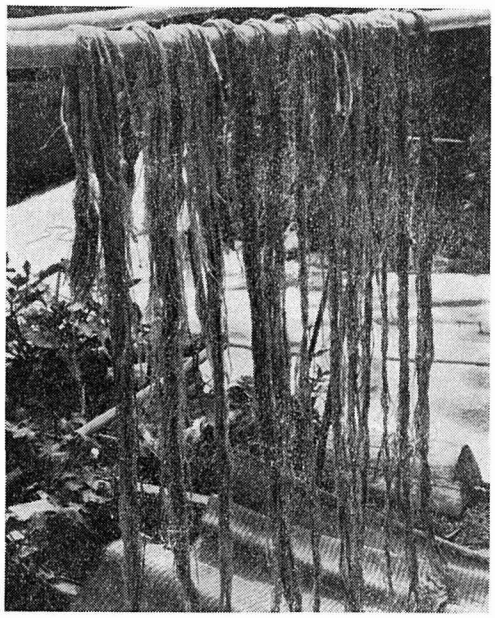


写真11

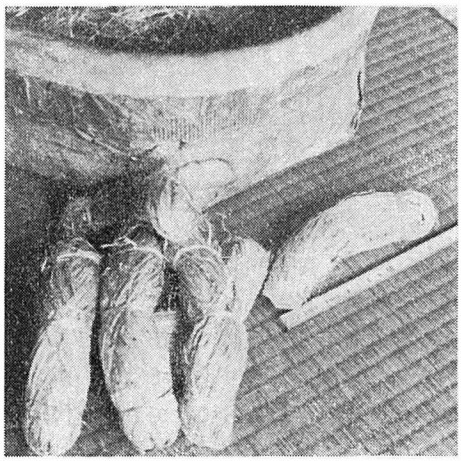
写真12

「つぐり」と「糸まき」の技術は，光沢ある織りと仕上がりに影響する。

### (5) 機　織

各農家で作られた葛苧は，はた織場に集められて，はた織機にかけられる。整経される経糸には木綿か麻を，まれには絹を用い，葛糸は緯糸に用いる。乾いていると硬く折れ易いので，

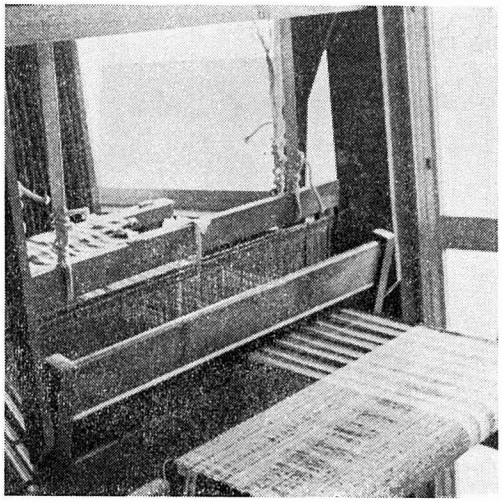
織り易くするため水に湿らせて軟かくして杼に入れる。並巾，広巾用途に応じて手織する。



写 真 13

赤，緑，紫，茶の縞に使う色は，現在は化学染料を用いているとのこと。昔の襖地の茶色はすべてももの木の皮で染め出したもので、1間巾の布を2人で織り上げたものだという。

（写真14）

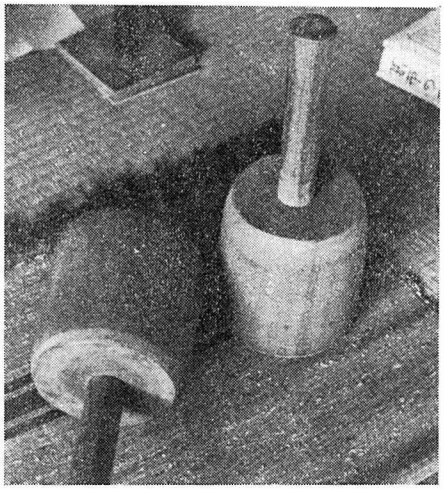


写 真 14

織り上った葛布を，欅や樫の木の槌で叩くと布に柔軟性が出る。（写真15）

この工程は，すべて手作業でなされる。出来上るまでの過程を実際にたどってみたが，それにかかる時間と労力は大変なものである。これは葛布のみならず，すべての手作り作品にいえることであろう。

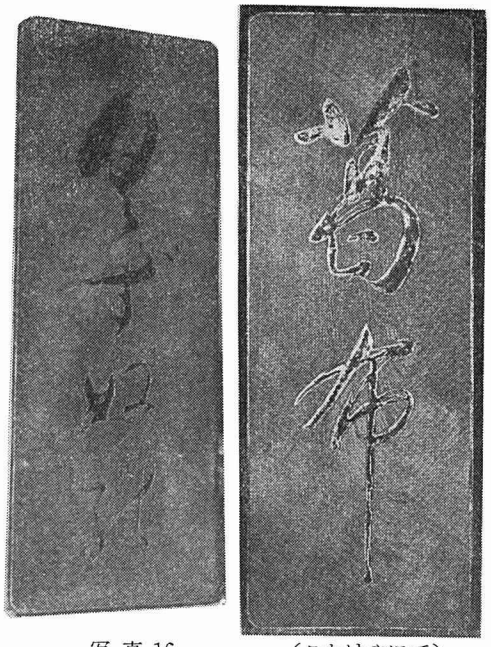
あらゆるものが機械工業化されている現在，尚愛着をもってこの伝統を守り，こつこつと地味な作業をつづける人達の忍耐と努力に敬服するものである。



写 真 15

### 3　葛布の現状と将来

掛川市における葛布は，これまで波を打ちながらも，昭和35年頃までは順調であったが，その後の不況で廃業する業者が出るようになり，今では川手幸吉商店が，手織りの技術を絶やすまいとこの伝統をうけつぎ，葛布の「のれん」を守って新たな民芸品を作っている。



写 真 16　（こたけやにて）

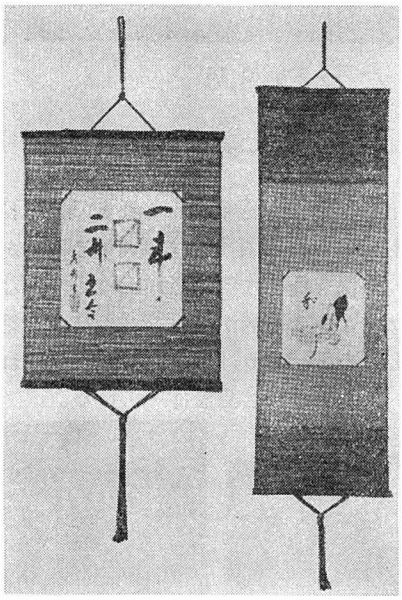
写真16の２枚の看板は，裏と表に彫られた木製で江戸時代のもの。文化財として同商店に残されている。色つや，摩りへり具合など当時の繁栄ぶりが偲ばれる。

葛布は，社会の動きにそって，衣服用から住居用に変り，更に今民芸品として脚光をあびるようになってきたのである。

主として，

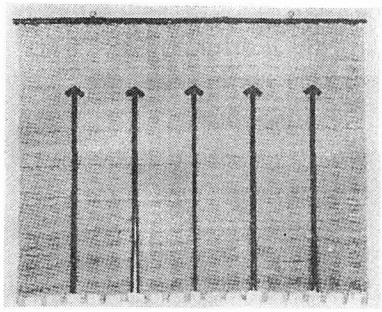
掛軸，茶掛，色紙掛
ハンドバッグ，がま口
テーブルセンター，座ぶとんカバー
のれん，家具ケースの化粧張地

土産品，記念品として広く利用されている。
（写真17）



写 真 17 ①

写 真 17 ②

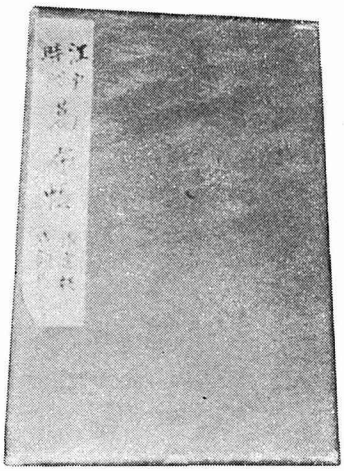


写 真 17 ③

手作り礼賛，民芸品ブームにのって，素朴で優雅な葛布製品は，順調にのびをみせていると思われる。反面，あまり上等ではないがコストの安い韓国産葛苧が入ってきており，代用品もかなり出廻っているようである。

写真18は，江戸時代の「葛布帳（かつぶちょう）」で，これも同店に残されているもので，縞柄その他が納められている。

現倉敷民芸館長の外村吉之助は，新らしい「葛布帳」を作りたいとあって，掛川からは色々原料をそのために提供した由。いづれ貴重な資料が揃って完成され，葛布に対する伝統はいよいよ固いものになろう。



写 真 18

この程「掛川手織葛布協同組合」が結成されることになったという。具体的にはまだ動いていないときくが，（55年10月現在）市全体の協力によって実現の運びとなるのも遠いことではなかろう。手作り民芸品が歓迎される昨今，関係する人達の熱意と努力によって，伝統の技術を生かし，更に新しいものが生み出されることを今後に期待するものである。

## おわりに

動物の獣皮，魚皮，鳥皮，羽根及び手近な植物繊維の利用は，生活する人々にとって，身体保護の重要な役割を果すものであることは，昔も今も変りはない。

豊富な被服材料の中に埋もれて，その便利さに馴れてしまっている我々は，原始の時代に用いられたであろう素朴な繊維材料について考えてみることは少ない。

化学繊維の普及している現在も，植物繊維による織物は，各地でその伝統を守ろうとしている。現実には今の社会状勢の波にのって，需用に答えているものもあれば，絶える寸前のものもあり，絶えたと思われるものを再現しようとするものあり，とさまざまである。

葛布もその中の一つといえよう。

葛は根，葉，茎，花のすべてが，夫々に人間生活にかかわりを持ち役立ってきている。その生態は極めてたくましく，万葉集，古今和歌集他の古歌に数多くみることができる。

葛布は，中国周時代に既に使用されていたことが，詩経や，書経に記されているが，日本においては，大和時代の帰化人，秦氏らの一族によって織られたであろうことが，大和吉野地方の国栖に関する記録から，推察される。万葉集（差七1272 1346）に葛織が少々みられるが，総じて「かづら」で作ったものとして扱われ，いつの頃から葛布が織り出されたものかは明らかではないようである。喪服とか庶民の衣として着用されたにちがいない。

鎌倉時代に武士の袴に使用されたことは古今著聞集などで明らかである。

秦氏らの流れと思われる人によって葛布の作り方が伝えられたという静岡県掛川は，その後東海道の宿場として繁栄，必然的に参勤交代の諸大名，旅人により，特産葛布の名声を上げるに至った。明治維新の改革と共に需用の少なくなった葛布は，従来の衣服用から，襖地，壁布という住居用に転換。昭和に入り，高度経済成長技術振興の時代を迎えて再び衰退。こうした波の中で，あくまでも伝統を守り育てようとする人達によって，新たに民芸品に切りかえて，ブームにのった。郷土民芸品として手作り葛布を残すべく，「掛川手織葛布協同組合を」結成してその振興に一層努力している。

機械化の進む現在ではあるが，手作り過程の並々ならぬ苦労と共にそのよさは捨てがたく尊い。大切にして，更に次の新しいものへの挑戦を今後に期待したい。

尚，葛布の性能に関しては，まだ報告の段階に至っていない。後日機会を得てまとめたいと考えている。

本稿について，多大なご指導とご協力を頂いた掛川市教育センター鈴木氏，池谷平七氏，織元川手茂市氏，戸塚一郎氏及び本学諸先生に深謝いたします。

## 参考文献

日本の古典　1．古事記上巻51（仲哀）河出書房新社
2．万葉集
10．古今和歌集
新古今和歌集
11．和泉式部集
拾遺愚草

玉葉集
新勅選集
伊勢大輔集
古今著聞集
夫木和歌抄
詩経
書経
日本原始織物の研究　岡村吉右衛門
葛布の歴史　戸塚一郎　P 3，P12，P14，P17
古代日本正史　原田常治　P 25，P 92，P 94
日本的生活の母胎　P 140，P 257～258 河出書房新社
日本被服文化史　守田公夫　P 19
草木染糸染めの基本　山崎青樹　P 28
人里の植物Ⅰ　長田武正　P 84
染織と生活　No.28　No.30　染織と生活社
朝日百科世界の植物　No.96 No.49 No.34 No.17
朝日新聞社

日本国語大辞典
古語辞典　講談社
世界大百科事典　平凡社
服飾事典　文化学院出版部